

この本の使い方

本書は、呈示された患者情報から自分で証を導いて処方・配穴を考え、その後解説を読むという流れで弁証論治のトレーニングを行うことをおもな目的としている。

また、症例は実際の臨床例であり、初診から治癒までの経過が記されているため、弁証論治のトレーニング用としてだけでなく、症例集としての活用もできる。

序章では、高橋楊子先生による弁証論治の進め方の解説と、呉澤森先生による特殊診察法の解説および鍼灸治療のポイントが述べられている。弁証論治を行ううえでの基本となるものが示されているため、症例を解く前にぜひ一読してほしい。

第1章から第6章は、疾患分類別の症例とその解説である。便宜上、症例は章を分けて通し番号をつけているが、どこから読み進めてもよい。

症例はそれぞれ最初の頁に弁証に必要な情報が示されている。次頁からは鍼灸および湯液の弁証論治解説部分になっているため、まずは頁をめくらずに自分で症例を分析し、弁証を立てることをおすすめしたい。続く解説部分では鍼灸・湯液2つの面からの治療法・考え方の解説がある。特に弁証については鍼灸・湯液の枠にとらわれず両方の解説を参考にできる。また、弁証過程において陥りやすい間違いなどが示されており、多くのヒントが詰まっている。

それぞれの症例は以下のような構成になっている。

- ◆**症例呈示**——年齢・性別・主訴・既往歴・現病歴・現症・四診の結果など、証を導くために必要な患者情報の呈示。
- ◆**治療へのアプローチ**——呉先生（鍼灸）と高橋先生（湯液）による解説。まず症例を呈示した先生による解説があり、引き続き補完する形でもう一方の先生による解説がある。
弁証：弁証，治則，具体的な処方あるいは取穴・手技，処方解説・取穴解説など。
治療経過：実際の治療の経過説明。
症例分析：症例を分析する際の考え方や，チャート式の病因病機図，最後には「弁証のポイント」がある。
アドバイス：弁証する際に陥りやすい間違いの鑑別点や，実践的で臨床に役立つアドバイスなど。

*本書は、『中医臨床』の連載コーナー「弁証論治トレーニング」の一部を単行本化したものである。誌上では出題・読者回答・解説の形であったが、単行本化にあたって読者回答は割愛した。